Here Now Bestopia
ベストピア Bestopia
第423号
2022年05月号
パリ通信
第125号

花とピストル

公認会計士・税理士・林　光行事務所
「シェアリングレター」第63号・巻頭言

二人が、後ろ手に花とピストルを持って行う心理ゲームがあります。
ルールは、「いち、にの、さん!」で後ろ手のどちらかを同時に出し、二人が花なら両者が1点を獲得し、二人がピストルなら共に1点を失います。お互いが違うものを出した場合、ピストルを出した人が5点を獲得し、花を出した人は5点を失います。

　実際のゲームでは、多くの人が勝つために(人によっては敗けないために)、ピストルを選びます。その結果、ゲームを続けると、互いが1点を失い続けます。
お互いが花を選び続けたら、加点を累積できるのに…。
現実の世界では、互いがピストル(大砲や核兵器) を選び、血を流し続けています。
互いが花を選んだなら、すべての先進国がGDPの2%(米国が西洋諸国に望む軍事費支出割合)を、世界の貧困、疫病、温暖化の対策に充てるなら、世界はどんな楽園になるでしょうか。

阪神･淡路大震災の数日後、僅かばかりの救援物資を携えて訪れた冬の神戸。
電気が途絶えた暗い道端で焚火を囲んでいる人たちを見ました。
東日本大震災では、もっと多くの人たちが寒さと不安に震えていたと思います。
思い出しても胸が締め付けられます。

そして今、ウクライナ。
果てしなく広がる蒼空と黄金の麦畑ではなく、砲火の下、街によっては水も電気もない厳寒の地下室で、親を、夫を、妻を、子供を、友人を失った人たちが、肩を寄せ合い、息を潜めています。一刻も早い戦の終結を願わずにはおれません。
この戦争から、私たちは何を学ぶでしょうか。
「核兵器を保有しないと自国の安全は守れない」ことですか?
そうではなく、私たちの行動によって、「核兵器で脅しても、郷土で平穏に生きている人たちは征服できない」という教訓を、歴史に刻むことは不可能でしょうか。
「避難民を助けよう!」「病院を、学校を、劇場を砲撃するな!」
「民間人に銃口を向けるな!」「すべての国は他国に軍隊を送るな!」。
世界の人が、そう思っていると伝えることができます。
募金に協力することもできます。
新型コロナ対応予備費5兆円。うち1兆円を避難民に、1兆円を中露の為政者の顔色を窺う国々の民生改善に。もっと多くのことが日本にはできます。
「平和」を唱える人を「平和ボケ」 と揶揄し、軍備や米国に頼れば事足りるというのも幻想です。文化も含め、総力戦です。平和を守るには覚悟と行動が必要です。

2022年4月発行

前ページの標題・文章は私が敬仰する公認会計士・税理士・林　光行先生の機関紙（季刊）です。今号は全24ページの構成になっており、毎号専門領域のみならず政治、憲法、文化、心理学に至る幅広い情報が満載されています。巻頭言はときに哲学的であり短文の中に豊富な知識を奥深く表現しておられます。先生のご許可をいただき掲載させていただくことになりました。皆さん、じっくり味わい、吟味してくださいますように。
先生の事務所は大阪市天王寺区にあります。奥様とおしどり経営をされていることでも有名ですが、顕著な特色は社会福祉事業分野に使命感を持って尽くされており、誕生して間もない社会福祉法人会計の平易な解説・普及に務められ、厚生労働省の社会福祉法人会計等検討会の構成員も務めておられます。平成19年度から3年間公認会計士試験委員を務められ、平成20年文部科学大臣表彰、平成24年大阪地方裁判所長表彰される等民事調停委員にも就任されていました。
事務所の雰囲気は和気藹々、明るく笑顔のたえない、しかも緊張感漂う清々しさを感じることでも有名な事務所です。謙虚ながら確固たる自信を持って顧問先様に対応されています。ホームページは次の通りです。www.share.gr.jp

「防衛費GDP比2％」についての若干の考察

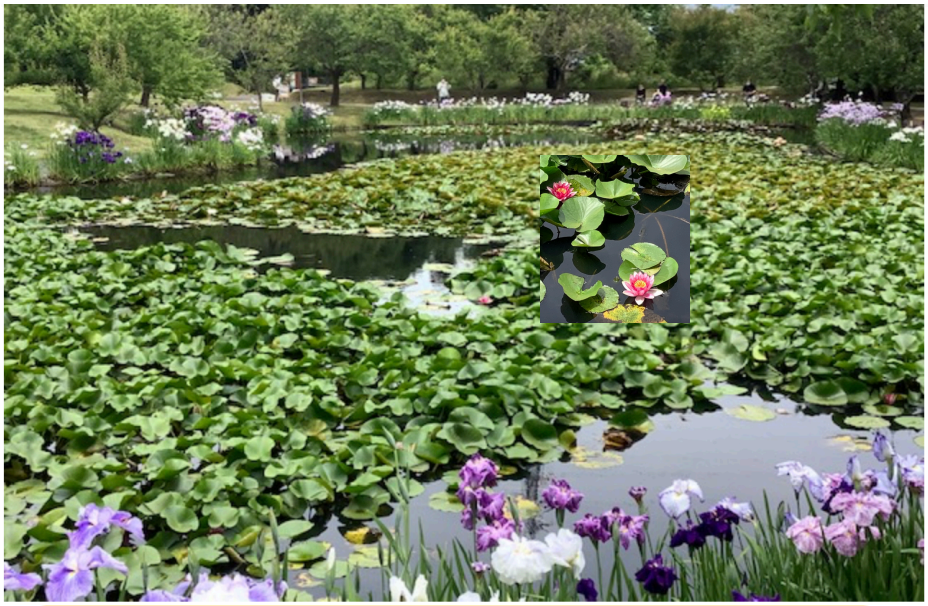
防衛費をGDPの2％以上にすることは、米国トランプ政権が2020年にNATO諸国など同盟国に要求したものだ。中国との対決姿勢を示す一方で、「米国第一」で米軍の海外駐留経費を減らしたい思惑からだった。NATO（北大西洋軍事機構）加盟の30カ国中11カ国はそれに達しているが、ドイツは1.56％、イタリアは1.39％などにとどまっているのが現状だ。（世界の平均は1.9％）

日本では、高市早苗自民党政務調査会長が衆議院議員選挙の公約として「防衛費を国民総生産（GDP）の2％水準にする」ことを掲げたが、総選挙で自民党が単独過半数を確保したから、この公約が実現するかが愁眉の関心を集めている。

今年の日本のGDPは595.5兆円と政府は見積もっており、その2％は11.9兆円だ。今年度当初予算の防衛費は5.1235兆円だから、公約を実現しようとすると、6.77兆円の「増額枠」を認めることになる。今の2倍以上になる。

　仮に「GDP比2％水準」になって日本の防衛費が11兆円余り、ストックホルム平和研究所の計算では、昨年の米国の防衛費が7780億ドル、中国が2520億ドルに次いで、日本の防衛費は世界第3位になる。ロシアは617億ドルで、その約1.6倍になる。ロシアの5月9日のパレードが参考になる。

政府・自民党は増やした防衛費を、相手国の軍事拠点をミサイルでたたく敵基地攻撃能力に活用する予算に使うことも視野に入れる。敵基地攻撃能力の保有は専守防衛を逸脱する恐れが指摘される。



小田原市フラワーパーク内のハス池　　平和です。

日本国憲法第９条

第九条　日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

②　前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

「戦力」に対する見解

- 政府見解：「自衛のための必要最小限を超えない実力」ゆえに自衛隊は憲法で禁ずる「戦力」には相当しない。
- 札幌地裁：自衛隊は「戦力」にあたり違憲であると判示（1973年（昭和48年）9月7日長沼事件）。これに対し札幌高裁は、「自衛隊が違憲か否かということは「高度に政治的な問題」であり、裁判所の判断にはなじまない」と判断（1976年（昭和51年）8月5日）。

以上の見解で我が国は現在の戦力を持つに至った。しかし、憲法前文の後半では

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

われらは、いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであつて、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立たうとする各国の責務であると信ずる。

日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ。

ここで今、問題になっていることは（以前からあったことであるが）

「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、」という高邁な理念が、現今の国際情勢、特に我が国を取り巻く状況が「信頼できない」こととなった。これは多数の国民感情である。本来であれば、相当の覚悟を持って、憲法を守るべく指導する者が現れても然るべきであるが、政治家はこの状況を「待ってました」とばかりに利用して2%を標榜し始めた。2%の数字を見て、さすがの彼らもこれは憲法改正が必要だと言わんばかりになって近々に「国民投票」を準備している。

現在、自衛隊では人員不足が続いており、国防費が2倍になっても人的な増員は困難である。よって増額分は高額な戦闘設備、あるいは集団的自衛権の拡大に充てられるしか道はない。これも政治家は熟知している。アメリカは日本が核武装する力を持っていることは知っている故に、日本に核を持たせるか持たせないか議論が分かれている。いずれに転んでもいいような対日政策が続いていくであろう。

今回のウクライナ戦争では映像によって悲惨な戦渦の結果を見ること、聞くことで多くを実感で学んでいる。そして反省をしながら、80年前を思いながら、同じ道を歩みたくない、歩むべきではないと学ぶ人も少なくない。世界の人々が今、最も恐れている事は「核の使用」である。それは他人事ではないからである。

今ひとつ学んだ大きなことはこの戦争で大多数の一般国民は誰も得（徳）をしないこと。むしろ全員が被害者であること。世界は関係性で繋がっているということ。平和であってこそ今の生活が維持できるということ。国民の賢さが求められている。特に我が国にあっては2%を阻止する覚悟が求められている。

夏目漱石は「草枕」で次のよう予言的名文を残している。

「文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を発達せしめたる後、あらゆる限りの方法によってこの個性を踏みつけ様とする、一人前何坪何合かの地面を与えて、この地面の内では寝ることも起きることも勝手にせよというのが現今の文明である。同時にこの何坪何合の周囲に鉄柵を設けて、これより先へは一歩も出てはならぬぞと威嚇すのが現今の文明である。中略。文明は個人に自由を与えて虎の如く猛からしめたる後、これを檻穽の内に投げ込んで、天下の平和を維持しつつある。この平和は真の平和ではない。動物園の虎が見物人を睨めて、寝転んでいると同様な平和である。檻の鉄棒が一本でも抜けたらーーー世は滅茶苦茶になる。(新潮文庫「草枕」p175)

次ページから

パリ通信第125号です。

パリ通信第125号

松濤館空手道黒帯２段昇段おめでとうございます。

昇段審査

5月14日(土)午前8時。パリ14区メトロ「ポルト・ドルレアン駅」から歩いて5分、エリザベス体育館でフランス空手連盟「昇段審査」が行われた。フランス空手連盟が創立されたのは1975年のことで、日本の空手道の他、ベトナム、東南アジアの武道を奨励している。連盟登録者数は約25万で、今回の審査は(ミットやヘルメットを付けるフルコンタクトではない)伝統空手の黒帯初段と二段で、朝6時に起きて会場に向かった。

空手を始めたのは6年前、歳と共に体力・気力の衰えを実感し、何かスポーツを始めようと思ったのがきっかけだった。フランスでスポーツといえば、ナンバーワンはサッカー、200万近いクラブ登録者数である。女子チームも増え続け圧倒的な人気だ。2番手がテニスで95万人が実践し、日本でも時々テニスはしていたので候補に考えたが一人ではできないし、パリ市内のコート探しは結構大変だ。3番目に人口が多いのが馬術で66万人を超える。馬は好きだが、馬術はお金がかかり現実的ではない。4位バスケット(52万人)、5位柔道(37万人)と続く。

日本の国技である柔道はフランスでも人気が高いが、武道というよりスポーツの色合いが濃く、受身ができないまま投げられては怪我のもとで柔道も現実的でない。柔道は無理だが、日本の武道は精神力60%、体力・技術40%で生涯学び続けるものだから、多少歳をとっても何とかなるかも知れないと思い、知り合いのフランス人が通う松濤館空手道の道場に通うことにした。
道着と帯だけでどこでも稽古ができる。組手の相手は必要だが、基本と型は一人でできる。個人技が基本だから自分のペースでできるし、同時に他者とも向かい合う。私の師範はアラン・トウーバスと言う70歳を超えた黒帯7段フランス人で、日本の空手をヨーロッパに伝道した日本人師範から直接教えを受けた世代の人である。
武道はスポーツとは違う。スポーツは表彰台が頂点で、武道は一生をかけて極めるものだといつも道場で繰り返している。東京オリンピックで空手が競技種目になった時もメダル争いは空手の精神に反すると嘆いていた。日本人の私にとっては説得力のある言葉だが、理解できないフランス人も少なくない。
稽古着に帯を締めると気が引き締まり、気合いが入ると言ってもフランス人にはピンと来ないようだ。道場の雑巾掛けから稽古が始まる日本と違って、遅れてきたり、稽古中にお

しゃべりする人も多い。稽古着はしわくちゃだったり、汚かったりで当初はびっくりすることが多かった。同じ空手でも日本とは随分様子が違う。
しかし、日本人は私一人と言うこともあって、アラン先生には一から基本を教えていただき、道場の皆にもとても親切にしていただき、黒帯2段まで到達できたことに感謝の念で一杯である。日本と同じく「昇段審査」は年2回、コロナ禍で2019年末を最後に2年以上審査は中断されていた。道場も閉まったままで自主稽古の期間が長く続いた。コロナウイルスに感染した時には審査は見送るしかないと思った。しかし、試験前日まで稽古をしてくださったアラン先生や皆の期待に応えることができてほっとしている。プレッシャーは大きかったが目標達成できて本当に嬉しく、私事ながら「パリ通信」で小原先生にご報告させていただきたいと思った。

理由のないロシア軍侵略で日常も命さえも奪われているウクライナの人々を思うと、日常生活を無事に過ごせることが有難いと思う。ウクライナ侵略が他人事でないフィンランドがNATO加盟申請を決議し、スエーデンもフィンランドに続くようである。いつ何をするか予想ができないプーチンへの脅威がヨーロッパ全体に広がりつつあり、ウクライナ軍事侵略から世界大戦へ向かうのではないかと怖い。フランスも軍事訓練を報道するようになり、自国を守る軍事力をアピールすること自体が戦争を準備しているかのようで怖くなる。マクロン大統領が再選されたが新内閣が待たれ、コロナ禍対策も中途で途切れ、16日(月)からは交通機関でのマスク着用義務もなくなる。世界に目を向けても国内を見ても不安材料ばかりでこの先どうなるのかわからない。ウクライナの戦火が一日も早く終わることを願うばかりである。